

地産地消とにいがた農業の未来⑩

佐渡の宝物 『おけざ柿』

主に佐渡市、新潟市などで生産される『おけざ柿』。品種には平核無(ひらたねなし)と刀根早生(とねわせ)の二種類があり、佐渡市の羽茂、小木、赤泊地区で栽培される柿を『(は)おけざ柿』と呼ぶ。昭和七年の導入から約八十年、「羽茂の宝物」と称される(は)おけざ柿。生産者の高齢化が進む中、「朱鷺の暮らすエコアーランド」で農薬・化学肥料の低減に努め、今日のブランド化を成功させた。その経緯と成功の陰にあつた原動力を訊いた。

原動力は郷土愛

佐渡に特産品をつくろう



佐渡は対馬海流（暖流）の影響で、積雪も少なく温暖で、昔から梨やみかん、柿といった果物がよく栽培された。昭和初期、日本中に不況の嵐が吹き荒れると、新潟県は「二十世紀梨の百ヘクタール栽培計画」を立て、指導員を佐渡に派遣。計画が発足する間際になって「梨より柿だ」と異論を唱えたのが羽茂村（当時）の農業技術員、杉田清氏だった。

J.A.羽茂・渡辺昌彦係長は語る。「畠野の栗野江柿、佐和田の真光寺柿、羽茂の山田柿と、江戸時代には北海道へ出荷するほど、佐渡はもともと柿の生産地でした」。山田柿は、のちの柿導入の礎となり、適地適作を信条としていた杉田氏が着目したのが『平核無』ひらたねなし』だった。「当時、平核無はすでに庄内柿として名聲を得ていましたが、昭和六年、原本が新津市古田で見つかったことから、杉田さんは新潟県原産の柿

を庄内から羽茂に持つてくれば、山形より品質の良い柿が産出できると考えたようです」。杉田氏が山形県鶴岡から一千本の苗木と一万五千本の接ぎ木用穂木を導入したのは、昭和七年春のこと。その後、生産面積が拡大され、昭和十一年、焼酎でさわした『八珍（はつちん）柿』を札幌に出荷。八珍とは「種がない柿は越後七不思議の次に珍しい」とから名づけられたと言ふ。

商品名を八珍柿から『おけさ柿』に統一し、羽茂産を表わす印をつけ、生産者名を入れて出荷するようになると、品質がさらに向上し、庄内柿より高値で販売されるようになった。昭和二十九年、東京銀座の果実専門店『千疋屋』への出荷が始まる、関東方面へ向けて最高の販売促進となり、千葉大学の指導を得て、研究指導会の開催、先進地視察、市場調査と、ブランド化への取り組みがなされていった。



十二月から一月の剪定、五月の摘蕾（てきらい）、七月から九月の病害虫防除、九月末から十一月の収穫に加え、肥料散布、草刈り、糖度を上げるための反射マルチや支柱の設置など、生産者による管理の徹底が高品質のおけさ柿を生むことは言うまでもない。

現在、『おけさ柿』は羽茂果実協会の商標登録となっている。会長理事の篠山茂雄さんは語る。「生産者数は四九九名、生産面積は平核無が一八八ヘクタール、刀根早生が一〇九ヘクタール、年間約五千トンを新潟県内のほか、北海道、東北、長野、東京、大阪などへ出荷しています」

古くから佐渡市羽茂地区で生産されていた『山田柿（別名：十二が柿）』の原木。江戸時代慶長の頃、旧羽茂村上山田の十二が平藤内左衛門が導入したことから名づけられた。「藤内柿」とも呼ばれる。



柿をカーテン内に入れ、炭酸ガスとアルコールのシャワーを交互に浴びせ、洗抜きを行う。これにより、「硬過ぎず、柔らか過ぎない」^④おけさ柿特有の品質が保たれる。平成9年、羽茂果実協会が特許を取得



佐渡市の羽茂、小木、赤泊地区で栽培される柿を『^④おけさ柿』と呼ぶ。

エコアイランドの品質

佐渡の宝物『おけさ柿』

つやのある色合いと、まろやかな味が特徴の^④おけさ柿。一本に三百から四百もの実が成る柿の収穫は、「一人が一日に約千個、一つずつ、鉄を使って手作業で行います」。収穫時期は刀根早生が九月末から十月二十五日頃まで、平核無が十月二十日頃から十一月十五日頃まで。いずれも実が熟した十日ほどの間で集中的に行われ、「生産者の高齢化が著しい近年、栽培や収穫の激務を軽減するため、低木化が進みました」と渡辺係長は語る。

笹山会長理事によれば、「最も苦労するのが台風や干ばつなど自然との闘いです。平成二十

年にはあらがが裏い、生産数が激減しました。それでも我々生産者は販売単価を上げようと大玉生産を心がけ、一個十円のペナルティを設け、「品質の低い柿はいつさい集荷場に持ち込まない」というルールを決めていました」。生産現場で厳しく選別が行われ、近年、栽培や収穫の激務を軽減するため、低木化が進めました」と渡辺係長は語る。

笹山会長理事によれば、「最も苦労するのが台風や干ばつなど自然との闘いです。平成二十

年にはあらがが裏い、生産数が激減しました。それでも我々生産者は販売単価を上げようと大玉生産を心がけ、一個十円のペナルティを設け、「品質の低い柿はいつさい集荷場に持ち込まない」というルールを決めていました」。生産現場で厳しく選別が行われ、近年、栽培や収穫の激務を軽減するため、低木化が進めました」と渡辺係長は語る。

笹山会長理事によれば、「最も苦労のが台風や干ばつなど自然との闘いです。平成二十

年にはあらがが裏い、生産数が激減しました。それでも我々生産者は販売単価を上げようと大玉生産を心がけ、一個十円のペナルティを設け、「品質の低い柿はいつさい集荷場に持ち込まない」というルールを決めていました」。生産現場で厳しく選別が行われ、近年、栽培や収穫の激務を軽減するため、低木化が進めました」と渡辺係長は語る。